

「環境・社会報告書2014」を読んで

環境経営とともに企業の社会的責任（CSR）や社会貢献の研究者としての専門的な知見と経験を踏まえ、客観的な視点から以下に第三者意見を簡潔に述べます。株式会社東海理化およびそのステークホルダー（利害関係者）の皆さまのご参考になれば幸いです。

「伝えたい」という気持ち

この報告書を拝読した最初の印象は、作り手の「知ってほしい」という気持ちが伝わってくる、というものでした。環境・社会報告書は顧客や社会とのコミュニケーションツールの一つ。ステークホルダーの皆さまはもちろん、社員とその家族に読んでもらいたいという姿勢が伺えました。本報告書は、一方的な押し付けではなく、アイコンや色、図で流れをつくり、分かりやすくデータを示すなど、読み手を意識したデザインになっていると思います。また、報告書に使うインクや紙の環境配慮だけでなく、UDフォントを使用している点はユニバーサル社会への意識を伺わせました。内容は、GRIや環境省のガイドラインに則して丁寧にまとめられていました。1点だけ申し上げますと、専門用語には簡単な解説をつけるとさらに良くなるでしょう。

環境の取組みを業務の根幹に

環境の取組みは流行ではなく、景気の良いときだけ行うのではなく、企業の本来業務の中に取り入れることが重要です。報告書では、業務の中いかに環境の取組みを取り入れたか、「カイゼン」を重ねた結果が示されています。軽量化・省資源化・長寿命化を実現した製品や製造工程、データが、開発者の声なども併せて興味深く記載してあります。

コージェネレーションシステムを早くから導入し、熱と電気を併せて一次エネルギーを有効に使うことで大幅なCO₂削減を実現していることや、省エネ診断を受け、さらなる「カイゼン」に挑む姿勢は素晴らしいと思います。また、「からくり改善」なるモノづくりの技を学ぶ場を設けているのは、楽しく考え工夫する、創造力を養う人材育成の場として大変有益だと思いました。

持続可能性（サステナビリティ）の向上をめざして

今後、組織の持続可能性パフォーマンスをより高めていくためには、徹底した環境リスクの低減はもちろんですが、突発的な自然災害に備えた対応力を高めるべく、また、そのためにも工場や社屋の断熱化などエネルギー消費量の削減と併せて、電気や熱の自立をめざしていくことも重要でしょう。さらに、すでに実用化された「竹」のステアリングホイールのように、エコでありながら品質も素晴らしいといった、新たな付加価値を生む製品開発を期待したいと思います。



名古屋大学 環境学研究所 特任准教授

杉山 範子氏

名古屋大学大学院環境学研究所博士後期課程修了後、同環境学研究所助教を経て、現在、同環境学研究所特任准教授（『レジリエントシティ政策モデル』の開発とその実装化に関する研究（環境省））。地域気候政策・エネルギー政策の確立に向けた研究を行っている（博士（環境学））。岐阜県山県市出身。愛知教育大学総合理学コース卒業後、（財）日本気象協会勤務。1995～2002年までテレビ愛知の気象キャスターを担当（気象予報士）。その後、名城大学大学院理工学研究所環境創造学科（工学修士）、名古屋大学大学院環境学研究所社会環境学専攻を修了（博士（環境学））。2012年1月～7月には「基礎環境学を担う若手人材育成プログラム」（組織的な若手研究者等海外派遣プログラム）により渡独、ベルリン自由大学環境政策研究所において客員研究員として研究した。NPO法人気象キャスターネットワーク理事。気象予報士。



第三者意見を受けて

杉山先生に本社・本社工場にご来社いただき、当社の環境配慮製品や生産現場をご視察いただいた上で本報告書に対するご意見をいただきました。深く感謝いたします。

本年度は当社の取組み項目と一年間の成果をステークホルダーの皆さまにわかりやすく伝えるため、構成を大きく見直しました。杉山先生には、「知ってほしいという気持ちが伝わってくる報告書」と評価いただき非常に嬉しく思います。

ご指摘いただいた突発的な自然災害に備えた対応力を高めるため、電気・熱エネルギーの利用効率をさらに高めていくことを今後の活動に取り入れてまいります。今後もステークホルダーの皆さまの信頼と期待に応える継続的な取組みを進めていく所存です。



環境統括役員
専務取締役

中村 弘之